

夭折の作家 久坂葉子と石野早苗さん

玉井洋子

毎年三月十七日に兵庫区の菓仙寺で行われる「神戸空襲・戦災犠牲者合同慰霊祭」。ある年、法要の行われる会館で「平和の人形展」が開かれていた。会場で私に歩みより黙って私の手を取り自身の右手に重ねる人がいた。「これ義手なんですよ」焼夷弾の直撃で片手を無くしたことを語ってくれた。その日、慰霊祭の司会を務めていた私は彼女にスピーチを求めた。その日から石野さんの日常に語り部としての



石野早苗 空襲の語り部として学校訪問活動を重ね 2016年80歳で逝去。

活動が加わった。

さらに、彼女との出会いは、数年後の思いがけない出来事につながっていた。

夭折の作家、といわれ今なお熱心なファンをもつ久坂葉子。ある日、久坂葉子研究会から送られてきた特集号をめぐっていると、未発表詩編のなかの「女の子」という詩が眼にとまった。瞬間、慰霊祭で私に話しかけてくれたあの人のことだと直感。記録する会に問い合わせ電話番号を聞き、早速ダイヤルすると「ああ、澄子姉ちゃん、知ってますよ」と即答してくれた。確証を得て研究会代表の柏木薫さんに知らせた。

日をおかず石野早苗さんと柏木さんのご対面となった。私も同席したその日の事は、翌日の神戸新聞に「久坂葉子の詩「女の子」のモデル発見」と大きな見出しがついていた。

昭和二十年六月と八月、二度も空襲にあい、焼け出された久坂一家が親戚や知人宅を転々としたのち、一時身をよせたのが諏訪山山麓で同じく仮住まいをしていた石野さんのお隣だった。石野さん一家が先にそこを引き払ったため、それからのちの六年でお隣の澄子姉ちゃんが作家として、華麗に変身した姿を石野

さんは見ていない。石野さん九歳、久坂葉子十五歳の頃のことである。

(神戸文学館には石野さんが寄贈した、お別れの記念に澄子姉ちゃんからもらったという幼女の絵が常設コーナーに展示されている)



久坂葉子 (本名 川崎澄子) 昭和六年神戸生

父方の曾祖父は川崎重工の前身川崎造船の創立者川崎正蔵。母方は旧加賀百万石十三代前田斎泰侯爵。父芳熊、母久子の次女。十九歳で雑誌に発表した「落ちてゆく世界」、改題「ドミノのお告げ」が芥川賞候補となり、その高い資質を称賛されながら、二十一歳の大海日に阪急六甲駅で電車に飛び込み自殺。(写真は『久坂葉子研究VOL. 4 生誕77年記念号』より)